

--	--	--

# スカイリミット

Fumio Kusanagi

2016 12.1

## 思い出

---

二人は隣の家に住んでいる、親同士が仲良く毎日会っている。名前はクミオとミンコ。走るのも頭も何でも出来た。親は普通のサラリーマンだけど二人の両親はもうお金もち確実に安心しきっていた。何といってもオールAだし。二人ともかっこいいし可愛かった。そんな二人の日常は勉強をしながらの会話だった。頭で考えながら言葉で喋りながら毎日5時間図書館で勉強していたからだ。その図書館は学校の前にあって二人にとっては遊び場だった。「すでに大学の勉強しているけど、面白くないわね」「そうだね、会社でも作ろうか?」「名前何にする」「ミリュージョンなんてどう?」「どういう意味?」「未来とイリュージョンをたして」「それいいわね」「じゃあ会社にしよう」二人は小学一年から会社ミリュージョンを立ち上げた。パパとママは驚かなかった。すんなり「いいよといった」会社は新しいパソコンを作る会社にした。そして新しい未来を作ろうそんな事を話していた。あっという間に話題になった。新しいパソコンMooは子供用から大人用まで全てワンタッチで操作できる物だ。もちろんノート型だ。学校ではこの事は秘密だった。「知ってる?MOOって、発売から一ヶ月でようやく話題になった。「どうMOO」「うん、最高!」「ゲームもネットも面白いし、AI機能で自分にあった情報もすぐ知らせてくれるし、タッチ操作で簡単に映像も作れるし、音楽作るのも声出せばすぐにできるし、面白すぎる」次に二人は料理に目をつけた。これが二人にとっては壁だった。どーやったら簡単に美味しい物を機械で作って食べれるか?「カップラーメンをとりあえず食べた」「閃いた」「パソコン型キッチンだ」それを小さくかっこよくした。具材を入れパソコンでカットとすれば切ってくれ、煮る、焼く、炊く何でもできる、そして燃えそうになったら必ず水が出てくるようになっている。今のキッチンより安心だ。この商品は売れに売れた。もちろんMooのパソコンもできるので主婦そうで大ヒットした。これでミリュージョンは軌道に乗った。だいたいお金はパパとママにあげていたのでお金頂戴と言えだめと言われ全部カードだった。学校でもお友達と楽しくドッチボールするのがリフレッシュだった。勉強も先生の話聞いて先生とも仲が良く、家に呼ばれては将棋をしていた。次は服をなんか面白く出来ないかと思った。とりあえず自分で作って、友達にあげた。うーん、パソコンばかりで作ってしまうのは何だか悪い気がしたので、毎日、玄関で着替えられるように玄関を改造する企画にした。部屋があってそこの入れば着替えられるという事だ。これもうけてしまった。やっぱりバカだなと二人は思った。なぜならこのMooキッチンで何でもできるようにしてしまっていたからだ。服、家、ジュースからパソコンまでそれを考えられる人がいるか?そしてここまでできる人がいるのか?試したけど誰もいなかった。そこでMooで何でもできるデウライトという新型パソコンを発売した。時代は変わった。

## 深みの1日

---

二人は中学でベストカップル賞を頂いた。そしたら何とクミオが仲間外れにされたのだ、ミンコが話しかけても反応がなく学校も休んだ。ミンコはしばし様子を見ようと思って学校の男友達と話した。そしてどこからか情報を得たのか、私たちが会社を運営してるのがばれMooもばれてしまったのだ。会社は二人で運営していたのできっとMooに入りたいのだと思った。そこでミンコは全員Mooに同級生だけ入れる事にした。会社は学校の近くのビルを買った。会社の方針は5時間勉強だ。それ以外は自由。それを守らなかったら給料が減る。というか強制で5時間ロック部屋を作り何も無い部屋で三冊の本を渡し勉強するようにした。だから給料も500万に全員固定した。幸せが幸せを呼び込むと考えたからだ。それでもクミオは学校に来なかった。心配になって家に行って見たけどいなかった。どこに行ったのか謎だった。わかった私と付き合いたんだ。中学3年だったのでキスもした事がない。私はドキドキした。そして学校夏休みを使ってクミオを探す事にした。きっと海外だろうと思っていたのでパスポートを取り、カードだけ持って追った。クミオが居そうな所に行って見るけど居ない。まさか！自殺でもしたんじゃないかと思って。自殺スポットをググって行って見た。居ない。幼い時話した時、結婚するならアメリカがいいって言った。そうか！アメリカだ！確か一才の時だから自由の女神。ふと、クミオは狙っているんじゃないか？これも演技なんではないかと疑った。うーん、面白くないな、そこでアメリカに芸術的な建物を建てた。そして世界を三日づつ回ってクミオを探す旅にした。やはり、居ない。学校が始まった。みんな成績も良くなってわが私立は世界で一番頭の良い学校として世界でも名を馳せた。仲の良かった男子にクミオ知らないと聞きたくなかったけど、聞いてしまった。クミオ？あーアメリカにいるよ、何にもしてないって。寝てるだけだよ。学校の授業も忙しかったので冬休みアメリカに行こう。そしてアフリカに二匹の犬を離そうきつと動物達も喜ぶはず。何となくそう思ったので犬を買いに街に出た。そして犬だけ話すため学校を一日休んだ。初めての欠席だ。そして犬を飛行機に乗せ気づいた、この飛行機を新しくしたい。それはクミオと一緒に考えようそう決めた。そしてアフリカについてタクシーの乗るのが嫌だった。だから裏で作っておいた新型Mooは車になる事が出来た。変化させそれに乗ってジャングルまで行った。もちろんソーラー機能でだ。犬にはあえて名前はつけなかった。なぜかというとなんか犬も人間の手だけでなく動物として生きて欲しかったからだ、犬だけ可愛がってしまっただけでは、他の動物が浮かばれない、そして動物を食べるのにそれに感謝して気づく事も出来ない人が多いからだ。もっと自然に感謝をしないと日本はいけない。そんな事を思って「さようなら、、、」と言って話した。そして車に乗って日本へ帰った。

冬休みななつた、寝ている住所もわかったけどあえて聞かなかった。きっと自由の女神の下にいる、むしろ来るのを待つ事した、冬休みの全部を。雪は降る、雨はふる、外国の人からどやされるわ。それでも待った。そして日本に帰る二日前、クミオは現れた。「待った?」「寝てたんだってね」「実はずっと勉強してたんだよ」「え!」「約束したろ、一才の時、この日、自由の女神の下でキスをしようって」「確かそのあと、ブルーベリーを食べたわ、覚えてる?」「もちろん」二人は初めてのキスをした。そしてまたいたって普通の生活が始まった。学校へ行き、その後二人で図書館へ行って、会社で企画をたてた。そしてクミオはなぜか昼休みにグラウンドを走っていた。毎日だそして10周を走り終わった後、必ず、逆立ちをしてジャンプしていた。私はそれを見るのが好きで、たまには機械の料理でなく自分の手で作った弁当を二人で食べた。私も何か始めようかと思って、ヒップホップダンスを始めた。やっぱり始めはストリートがいいと思って、街に行って、話のあった人のクルーに入った。そしたらあなたは歌った方がいいわよ。声が美しいしと言われて、クルーでは歌を歌った。そしてクルーのみんなはダンスしてくれた。そして爆発的に人気になり、テレビ雑誌などに掲載されあつという間にトップアーティストになった。そして会社の飛行機改造もうまくいって。新型パソコン飛行機が何とか許可され個人で空を飛べる時代になった。クミオは相変わらずのんびり走って逆立ちして勉強もしっかりして、楽しい毎日だった。そしてクミオも映画を撮りたいといい、即座に伝説的な映画をとりあつというまにアカデミー賞をとった。もちろん最後のエンドロールはミンコの曲だった。みんなが泣き、そして僕たちも映画を見ながら手を握って愛を確かめた。僕はミンコの事が好きだ、綺麗で頭が良くて、スポーツもできて、こんな幸せな事はない。二人でもっと面白い事はないのか、卒業の時に思った。「卒業記念で会社でなんか面白い事できないかな?」「学校で花火を打つなんてどう?」「なんかここまで迷惑かけて進んでしまったし、なんかありきたりな事を面白くできないだろうか?」「ありきたりな事か、、、」「グラウンドでみんなで歌を歌おう」「もちろん、校歌で」「そうだね、なんか演奏隊入れて、先生たちに感謝の気持ちも込めて」「あれ?でも卒業式で歌うよね」「そうかー」「じゃあ、僕たちが思う、校歌を歌おう」「そうしよう」当日、卒業式、みんな号泣し、卒業生以外の生徒たちも泣き。先生たちも泣いた。僕はボタンだけでなく制服やパンツまで後輩に奪われ、コンビニ買ったパンツ一枚で新校歌を歌った。ミンコも後輩たちから花束手紙など山どころでないくらいもらいそれを僕に持たせたので、パンイチ、花束手紙と散々な卒業式となってしまった。そして僕たちはもちろん同じ大学へと進んだ。

大学では経営科を専攻した。ミンコも経営科を専攻。二人でどのサークルに入ろうかと悩んだけど大学は大学らしく、テニスサークルにした。初めてのお酒も経験した。とってもまずく僕には合わないと思った。ミンコもお酒はダメで。二人してつままないね。と思ったのでサークルを立ち上げる事にした。そしたら、人気で300人くらい集まった。そしてそのまま会社に入れてしまった。そろそろみんなも5時間勉強部屋いいかと検討したんだが経営理念を変えると今までで積み重ねてきたものが壊れる気がしたので。5時間勉強は大学からもこれからも続けていこうと決めた。そのサークルは未来宇宙計画、そろそろ宇宙に行ける時代にしていこうそういったサークルだ。ここまでは私生活を変えてきて建物も変えてきた。だいぶ新しい未来を築けたと思う。そして大学に入った瞬間、「新しくしすぎてしまったと少し後悔した」それは機械が軸にしてしまったという事だ。温もりもない簡単、新しい。でも、時間が作れる。その時間を愛に変えて行くそれが今後の課題であり。愛がないと機械も使われていて悲しむだけだと思っただけだ。機械は機械であり人間は人間だその中に両立した未来があるはず、僕とミンコの願いだった。そして頑張って愛をみんなに注いだつもりでいる。この先は宇宙の開発、この人間が入れる新型宇宙パソコンで宇宙に行ける時代にするそれが目標だ。そしてミンコと僕とサークルメンバーで話に行くと「もちろんいいですよ」と返事が返ってきたので、作る事になった。そして完成し、火星が彗星が土星が宇宙で新しい未来の家になり機械で空気を保ち生活する時代になっている。僕はここまでと決めた。ミンコと前に話した計画はここまでだ。だからミンコに宇宙で告白した。月でだ、なぜなら一歳時に自由の女神の後に結婚は月でいうねというお付き合いの約束をしていたもちろん結婚も言ったけどそれは場所は言わなかった。そして僕は言った「お願いします、付き合ってください」「お願いします」僕はホッとした。そして静かにキスをした。そして記念に宇宙の彗星にザノーデという建物も建てた。僕たちの未来日記はここまで、それからを考えた、だいたい終わってしまったからだ、この先は？「よし、こうしよう」ミンコも考えた「よし。これだ」二人で新しい未来図を考えた、それはもちろんお金のためでなくみんなが素敵な生活になるためであり、幸せと愛をとという事が大前提だ。そうしているとスーツを着た悪そうなヤクザが現れた、宇宙丸ごと変えてしまったね、ちょっと顔出しな。「ドキッとした」僕は思った、やっぱりやりすぎてしまっている、変えてはいけないものも変えてきた、昔ながら生きている人たちもいる。そういった大切なものの中で見失ったもの、怒るだろうなどは予想していた、そのために学校を休んで海外でボランティアしたり研究会に参加したり、映画を見たり、一生懸命動いてきた。けど、時代を変える事は悪い事でもあるんだ。現実だけが現実ではないし、未来が未来だけでもない、過去が続いて今がある。過去から続いている物の歴史が重くのしにかかるそれはやはり今も大事にするが過去も大事という事なんだ。時代を変えるという事は今を消し去るんだ！そして僕とミンコはヤクザの部屋に入り謝った。「すみませんでした」そしてこう言われた。「もう、これ以上何もするな」僕たちは「わかりました」といい自宅へと帰った。

僕たちは未来図を新しく描き直した。後は普通に生きようそう誓った。お金も稼いだし、カフェを運営しながらほのぼの過ごそう、そして、大学を卒業して作った。会社自体も縮小した、50人まで減らし、今後はカフェで展開して行きますなので、大変申し訳ないのですが、ここまで致します。最後に一人一千万円渡し、「ありがとうございました」と言って別れを告げた。そして僕たちは地球に拠点を置き、ありがとう地球、君があったから僕たちの計画は出来た、宇宙ってすごい！そして僕たちはありのままの表現しただけで、なぜ理解をしないのかわからないが、頑張ってきたから考える事ができるんだと思う。そしてカフェオープンと同時に結婚した。もちろんミンコとだ。暖かい家庭でなに不自由なく楽しい生活で、毎日が幸せだった。朝起きればミンコがいて、ご飯が食べれて、テレビが見れて、大好きな本が読めて、今日死んでもいいよ、いつ死んでもいい、それぐらい納得した人生を設計してきた。だからミンコとのカフェもとても楽しい。ミンコもマイペースに人生を楽しんでいるようだ。そして、幸せすぎるとは、思っていて、またヤクザが来た。そして店をぶっ壊し、燃やして行った。僕たちは悪い事していないのになぜ？と思った。きっと革命児は革命を起こし続けたいといけないんだ。ほのぼの幸せしていたらいけない人間なんだ。ふと思った。そしてこの事件があってからミンコの様子がおかしくなり始め、「なんだかあなたといるとおかしくなりそう」「何を言ってるんだ、これまで楽しくやって来たじゃないか」「楽しいだけじゃ、やっぱり生きていけないのよ」ミンコは心に刺さる言葉を吐いた。僕も同じ気持ちだった。けどどうしたらいいのかわからなかった。「カフェ辞めよっか」このセリフにミンコは切れた。そして「さようなら」といい出て行った。そして次に日、離婚しますと離婚届けを渡された。「何いってんの？」「もう戻れないのよ、最後に進む？進まない？」僕は疲れ切っていたので「このままがいい」と言った。「それでは離婚ね」ハンコウを押した。そして離婚をした。一体、どーしてなんだろう僕は泣くに泣けずにいた。そしてミンコ以外愛せないのが原因が何か突き止めた。そしたら気づかなかったが裏で会社を運営していた。「僕は驚いた」なんとそれは宝石店だった。そしてその店の名前はクミオだった。何が原因かはその店の名前で見つけるのを辞めにしたきつと言いたくない事でもあったのではないか、全く隠しもしていないと思っていたけどそんなそぶりは全くなかった。そしてカフェだけで規模を小さくしてしまった自分を不甲斐なく思った。革命には革命という言葉が心に刺さった、それでも僕には限界だと思っていたでも彼女は違った、まだ作れる、勢いは凄まじかった。それを止めようとした僕のせいだ。そして、今カフェを辞め、ミンコのために映画を撮っている。